

2015年度 金沢星稜大学人間科学部会学術講演会

金沢大学 教授 折川 司 先生
学校教育系

「小学校国語科における読解指導のポイントと絵本の活用」

The Points of Reading Instruction and the Use of Picture Books in Primary Education

〈講演会風景〉



日時：平成27年10月17日(土) 10:30～12:00 / 会場：金沢星稜大学 A11 講義室

折川 司 抄録

Summarized by Tsukasa ORIKAWA

1 求められている学力の正体を知ることの意義

国語学力を測る方法の一つとして現在よく知られているものに全国学力学習状況調査があります。いわゆる全国学力テストです。そのため、小中学校の教師の中には「国語学力を向上させるためには、全国学力テストの過去問や類似した問題を繰り返し子どもたちに解かせていきさえすればよい」と短絡的に考えている人もいます。しかし、言うまでもなく、全国学力テストの問題が子どもたちに必要な国語学力の全てをカバーできているわけではありません。それに、重要なのはあくまで生きた言葉をやりとりする日々の授業の積み重ねです。ですから、状況によっては過去問を繰り返し解かせるといったやり方もいいと思いますが、そのみに頼るといった安易な考えは危険です。教師は、今の時代が求めている学力の正体が何であるのかを自身で理解し、そして、それを鍛えるには物事のどんなところに着目して、どのように、どれくらい子どもたちに投げかけていけばいいのか等々を細やかに考えていくことが必要です。そうでなければ、本質が見えていないまま非効率的な指導を行ったり、旧来と何も変わらないやり方を反復したりすることになってしまう恐れがあります。

今日は現在向上が求められている国語学力の一つ、読解力を取り上げ、その正体をPISAというフィルターを通して考えてみたいと思います。そして、小学校の読み物教材を使いながら、読解指導における着眼点や手立てについて整理していきましょう。

2 学習指導要領において重視されている習得・活用・探究

最初に、現行の学習指導要領において重視されているポイントについて整理しておきましょう。学習指導要領を支えて

いる柱はご存じのように複数あります。国語に関するものは、例えば言語活動の充実や言語に関する能力の育成、伝統文化の尊重などです。こうした柱の中核に位置づいているもの、それは「習得・活用・探究」という考え方です。

「習得」というのは、ごく簡単に言うならば、知識や技能を手に入れていく学習活動です。しかし、知識や技能をただ単に記憶して蓄えていくに留まるのであれば、学校教育においてそれほど意味のある活動とはならないでしょう。なぜなら私たちは子どもたちを単なる雑学王にしようとしているわけではないからです。知識や技能を蓄積しつづけるだけでなく、それらを実生活に活かすようなものにしていく、つないで活かしていくようにすることが大切です。それが「活用」という考え方です。もちろん、こうした考え方というのは最近始まったものでは決してありません。以前から優れた教師たちは工夫をしながら「習得・活用」のような授業を組み立ててきました。ただ、これからは今まで以上に、「習得」したものを活かしていく道筋に目を向けていきたいと思いますというわけです。

そして「探究」。次の部活動の図を見てください。「習得・活用・探究」の三者がどのような関係にあるかイメージできるとと思います(図略)。

では、今から部活動を例に「習得・活用・探究」を説明していきます。皆さんは野球部でもサッカー部でも吹奏楽部でも、適当な部活動をイメージしてください。何の知識も技能もない新入部員は、まず野球やサッカーがどのようなスポーツであるかを正しく理解するとともに、必要な技術を少しずつ身につけていかなければなりません。先ほどの「習得」は、部活動でいうと、競技やルールの理解、技術的な基礎練習の部分にあたります。

基礎練習によって必要な技術のある程度身につけることができれば、優秀な指導者は、次に何を仕組んでいくでしょうか。そうです。身につけたものを必ず活かせるような場を設定しての練習です。いわゆるミニゲームという状況設定練習です。このミニゲームでの取り組みが、学習活動における「活用」の考え方と似ているのではないかと私は捉えています。部活指導者は、部員に例えばドリブルという技を学ばせたら、次に、そのドリブルが必ず使用される状況を作り出して練習させていくでしょう。そうして部員たちはドリブルを使う感覚のある程度リアルな状況の中で養っていくわけです。これは、教室において、「習得」した教科に関する知識・技能を必ず「活用」しなければならない場を教師が授業の中に意図的に作り出し、子どもたちに経験させていくことと同じです。教科学習においても、「習得」したものがどのような時に、どのような形で使えるのかを活用の場を踏むことによって経験的に理解していきます。ですから、せっかくドリブルを学んだのに、ミニゲームにおいて一度もドリブルをしなかったというようでは「習得」と「活用」との間に関連性が生まれず、相互の意味が薄れてしまいます。

「探究」は、部活動でいうならば試合や演奏会のようなものかもしれません。「習得」と「活用」の積み上げによって今まで培ってきた力を子どもたちに総合的に発揮させる場です。学校教育においては、子どもたちにある程度の裁量権が与えられる総合的な学習の時間や教科内総合学習が、「探究」の時間の最たるものでしょう。「習得・活用・探究」は、このような関係にあるような気がします。

冒頭でお話ししたように、これらの力、特に「習得」と「活用」に関する力がついているかどうか見る手段の一つが全国学力学習状況調査です。

3 習得と活用の力を測る全国学力学習状況調査

全国学力テストでは、A問題とB問題という二種類の問題が提示されています。調査問題の基本理念によると、A問題は主に知識に関する内容で、「身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や実生活に不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能など」を調査することを狙いとしているようです。もう一方のB問題は、主として活用に関するもので「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や様々な課題解決のための構想をたて実践し評価・改善する力などにかかわる内容など」を調査することを狙いとしていると説明されています。

ご存じのように、現代社会は流動的で不安定、そして複雑です。習得したものをそのまま、目の前の状況に当てはめれば何とかなるという単純明快な事態はごく僅かで、多くの場合は状況や条件に合わせて知識や技能を選択したり加工したり、組み合わせたりして活用する柔軟な実践力が私たちに

は求められます。全国学力テストは、内容面で決して十分とは言えないのですが、そうした柔軟さが子どもたちに身につけているかどうかを確認するための一手段となっています。

4 知識・技能の柔軟な活用を求めるということ

柔軟な実践力といえば、皆さんに紹介したいエッセイがあります。哲学者の鷲田清一さんがお書きになった「学力調査についてつらつら思うこと」という文章です。少し道草をして、その一部を紹介したいと思います。

「学力」ということでいつも思い出すのは、ある発達心理学者がお子さんの学校での苦い経験として語ってくださった一つのエピソードである。

そのお子さんは、小学生のころ、古い卵と新しい卵とを見分ける方法を授業で習った。黄身が高く盛り上がっているのが新しく、黄身が平べったくなっているのが古いと教わったというのである。割ってから卵の新しさを確かめるというのだから、そもそも何のための調べごとかよくわからない。

ところが、これがあとで試験に出たのである。

「図のような二つの卵があります。あなたはどちらを食べますか?」

こうした設問を課せられて、お子さんは迷いなく平べったいほうに丸をした。彼以外のクラスメートはみな、盛り上がっているほうに丸をした。結果、彼だけが「誤答」とされた。

興味深いエピソードですね。クラスでただ一人、文中のお子さんだけが平べったくなっている方に丸をつけ、テストで不正解とされてしまいました。彼は、なぜ平べったくなっている卵を選んだのでしょうか。皆さんなら、どちらに丸をつけますか。

この先も読んでみましょう。

お子さんにしてみれば、冷蔵庫から卵を二個取り出して、賞味期限に差があれば、まず古いほうから食べるというのがあたりまえのことである。それが不正解とされて、彼はひどく傷ついたのであった。

「どっちが新しいのか?」と問うのに「どっちを食べるか?」という問いを立てるとというのがそもそも論理的でないのだが、それはさておき、この問いは、そもそも何のために新しいか古いかを調べるのか、それが判ったらでは次にどうするのかというふうには、日常生活のコンテキストのうちに位置づけられていない。

つまり、設問として孤立している。だから、この知識はついに身につくことがないし、今後も使用されることはない。

両親が共働きのため、じぶんで料理することも多かったこのお子さんは、まさかそんな無意味な問いが出されてい

るなどとはつゆ思わず、家事というコンテキストのなかで、自分ならどうするかと考えたのである。学力ということで、いつも思い出すのは、ある発達心理学者が苦い経験として語ってくださったひとつのエピソードである。そのお子さんは、小学生の頃、古い卵と新しい卵とを見分ける方法を授業でやった。黄身が盛り上がっていると新しく、平べったいと古いと知った。割ってから、古いか新しいかが分かるのだから、何のための調査か分からない。

驚田さんは、この卵の問題を「孤立した設問」と痛烈に評しています。そして、この知識は「今後使用されることなどない」と切って捨てています。卵に関する雑学的知識が蓄積されているかどうかを問うているに過ぎないではないかというのでしょうか。確かに実生活の文脈で考えれば、文中の彼とは別に、卵アレルギーの子どもは新鮮だろうが古かろうが食べられない、つまり解答できないとなるし、すでに両方割ってしまっているから悪くなる前にどちらも食べざるを得ないという判断なども子どもの中から示されそうです。

では、出題した教師はどのように問えばよかったですでしょうか。リアルな文脈の中で柔軟に知識や技能の活用を求めているような問題をここで考えてみましょう。皆さんならどのような問題にしますか。

私が出題者なら、例えば「割ってみたら黄身が平べったかった。さて、どんな料理を作ると良いか?」などと問うかもしれません。黄身が平べったかったということは、あまり新鮮な卵ではないということです。となると、火をよく通して食べなければならぬとなり、火をよく通して作る卵料理に何があるかを考えていく。そんな問いにすれば面白いかもしれませんね。習得したことを活用する柔軟な実践力とは、このような思考力を言うのではないのでしょうか。では、本筋に戻しましょう。

5 各自の読解指導観・読解力観の見直し

それでは、今から読解や読解力について小学校6年生教材の「平和のとりでを築く」と4年生教材の「ごんぎつね」を使って考えていきたいと思います。どちらも光村図書出版の国語教科書に掲載されている教材です。

まず、説明的文章の「平和のとりでを築く」を読んでみてください。

一般的な読解指導を行うとき、教師は子どもたちに大小様々な問いを投げかけていくと思います。発問は学習指導の推進力です。皆さんが教師なら、「平和のとりでを築く」を用いた読解の指導において、どのような問いを投げかけますか? 問いを五つ以上考えて、レジユメの余白にメモしてみてください。

皆さんが考えた問いを分類してみましょう。今からA、B、Cという3種類の枠組みを提示します。皆さんが考え出した問

いが、それぞれどのカテゴリーに属するかを判断してください。まずAの枠組みです。

【A】

その発問の答えは探せば文中にはっきりと示されています。あてはまる箇所を抜き出してあげればOKです。

どうでしょうか。当てはまる問いはありましたか。次にBの枠組みです。

【B】

その発問の答えは文中にはっきりとは示されていません。文脈から推測したり、複数の読みをつなぎ合わせたりして推論したり、内容をまとめたりすることによって妥当な答えが見えてきます。

最後にCの枠組みです。

【C】

いわゆる「唯一絶対の正解」はありません。読み手自身の経験や知識を用いて、根拠を示しながら書き手の考え方や書かれている内容の是非などについて自分の考えを述べたり、書きぶりを吟味検討したりすることを求めます。

皆さんが考えた五つの問いは、どのカテゴリーに属するものだったのでしょうか。このA、B、Cは、OECDがPISA調査において使用している読解の三つの側面を私流に表現をアレンジしたものです。PISAではそれぞれを「情報へのアクセス・取り出し」「統合・解釈」「熟考・評価」と呼んでいて、これら三つを合わせたものがPISAが示す読解の全体像となります。こうした読解の各側面を国語の指導においては積極的に意識・活用し、三種の問いをバランスよく、また関連づけて提示して、子どもたちの読解力を調和的に育てていくことが重要です。例えば、後で取り上げる「ごんぎつね」のような文学的文章教材の指導においては、「登場人物の心情を問うことこそが読解だ!」みたいに視野の狭い考え方をしている教師は未だに多いのですが、それでは子どもたちにBの問い、それも心情に偏った内容ばかりを考えさせることになり、AやCの思考が疎かになってしまいます。

学習指導の推進力である問いには各教師の指導観が非常によくあらわれます。今紹介した例のように、皆さんが読解や読解力をどのようなものとして考えているかは、皆さんが考え出した問いを見ればよく分かります。もし、作り出した問いが全てAの領域に入るものだったというような偏りがあった場合、その人は読解というものを「Aのような行為だ」として一面的に捉えているのかもしれませんが。思い当たるようであれば、自らのバランスの悪さを省みつつ三つの側面をふまえて読解指導観を修正すると良いと思います。

6 PISAの読解力調査と全国学力テストの類似

先ほどから登場しているPISAとはどのようなものなのでしょう。皆さんはすでに知っていますよね。簡単に説明してもらえま

すか。

PISAはProgramme for International Student Assessmentの略で、OECDが行っている国際的な学力調査です。2000年から始まり、数学・読解・科学に関するリテラシーを3年おきに調べています。教育に関する国際的な機関はユネスコですが、OECDが学力調査をやっているというのは面白いでしょう。

PISAに関する資料を読むと、行われている読解力調査は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」を測るものようです。この文章を読んだだけでは、その内容が少々イメージしにくいと思いますので、日本の二つの機関が読み替えたものも併せて見てみましょう。国立教育政策研究所と文部科学省のものです。

国立教育政策所は次のように読み替えています。「これに対しPISAは、(中略)生徒がそれぞれ持っている知識や技能をもとに、自らの将来の生活に関係する課題を積極的に考え、知識や技能を活用する能力があるかをみるものである。」また、文部科学省は「すなわち、この調査は、義務教育修了段階の15歳児が、その持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価することを目的としている。」と説明しています。

さて、両者が読み替えた文章の文言を見て、気がついたことはありませんか。

PISAの読解力の調査において狙っていることと、全国学力調査が狙っていることとに類似している点が多いということに気がついたでしょうか。知識や技能を活用するという点、実生活での活用を重視するという点が似ていますね。PISAの話を始めると、時に「全国学力テストの方が大切です」と力説する教師に出会うこともあります。実はPISAの読解力調査を知ること、国が求めている国語学力を理解することでもあるというわけです。PISAについて知り、その理解を深めて日々の国語実践に活かしていくことは、日本の国語教育が目指しているものや求めている学力と向き合うこと、何より読解指導の具体的な切り口を得ることにつながると思っています。PISAと全国学力テスト、さらには学習指導要領等々の関係を細かに見ながら文部科学省の思惑を推測していくと面白いのですが、今回は時間がないので省略します。

ここまでにおいて、手に入れた情報を柔軟に活用できることの重要性、そして、そうした力を読解という場において鍛えていくためのPISAの三側面の理解と実践への組み込みの重要性について話をしてきました。では、PISAでは具体的にどのような問題が出されてきたのでしょうか。少し見てみましょう。

7 「インフルエンザの予防接種」の問題に含まれる日常性

ここに、PISA調査において過去に使われた問題があります。インフルエンザの予防接種についての問題です。なかなか面白い問題ですので、私は講演でこれをよく取り上げます。では、まず各自で読んでみてください(問題文略)。

読んでみて感じたことはありませんか。何だか分かりづらい文章だなという印象ではないでしょうか。金沢大学の学生たちに尋ねても、小中学校の先生方に尋ねても、大体皆そのような反応です。それは、一体誰が予防接種を受けるのか、いつ行われるのかなどの大切な情報が文中に埋め込まれてしまっているからでしょう。また、タイトルのフォントやポイント数が地の文章とさして変わらず、目立たないことも一因でしょうか。逆にウイルスや注射器のイラストと「健康第一」という標語が強く主張していて奇妙な感じですね。皆さんが教師で、子どもたちがこのような文章を書いてきたら書き直しを命じるのではないかと思います。こうした欠点のある文章を読解するのがこの問題です。教科書に載っている洗練された文章の読解しか経験したことのない子どもたちは戸惑うようなものなのでしょう。しかし、このような文章は、実は回覧板に挟まれた町内のお知らせや手書きのダイレクトメールなど、日常生活の至る所で見ることができ、私たちは日常的に読んでいます。実生活においては結構身近なものでありながら、国語科の読解指導においては今まであまり重視されてこなかった対象ということになるかもしれません。

さて、この文章を用いてPISAが設けた問いを、次に二つ紹介します。一つ目は、

ACOL社の予防接種プログラムについて述べているのは、次のうちどれですか。

です。答えは四択です。

- A 冬の間、体操のクラスが毎日開かれる。
- B 勤務時間中、予防接種が実施される。
- C 参加者には、少額の手当が支給される。
- D 医師が注射する。

正解はどれになるのでしょうか。そうです。Bですね。この問題は、先の発問の分類で言うと「A」にカテゴライズされており、PISAでいうところの「情報へのアクセス・取り出し」という読解を要求する問いになります。

この問いに関して、日本の子どもたちの正答率は非常に高かったようです。金沢大学の学生も迷うことなく正答を引き出すことができていました。

では次の問題はどうか。

町田さんは、この通知を親しみをこめて誘いかけるスタイルにしたいと考えました。うまくできていると思いますか。通知のレイアウト、文体、イラストなどについて詳しく述

べながら、そう考えた理由を説明してください。

少しハードルが高くなりましたか。これは「C」のカテゴリされるもので、PISAでは「熟考・評価」の問いに該当します。皆さんは大人ですから、要求をすれば、大半の人は苦悶しながらもそれなりに答えを出すことができるでしょうが、なかには戸惑いをもって受け止めた人もいたかもしれません。

この二つ目の問題に対する国別の回答状況を、完全正答・部分正答・誤答・無答の四つにわけて見てみましょう。スクリーンの表を見てください（表略）。表中に掲げた日本を含む国々は、先進国を中心に比較的よく耳にする11カ国です。

完全正答率の最も高かったのはイギリスで65.7%、部分正答も合わせると7割を越える正答率でした。PISA調査の成績の良さで世界的に有名になったフィンランドは正答率54.4%で、この問題に関してはそれほど高くはなかったようです。アメリカは非常に誤答が多く、書いたけれど間違っていた子どもが多くいました。無答率を見るとフランスが高く29.8%。3割近い子どもが無回答で提出したことになります。

では、日本はどうでしょうか。日本は、半数近くの子どものがこの問題に対応することができていたようです。まずまずの成績です。しかし、無答率を見ると、フランスを越えて非常に高いのが分かります。つまり、日本には、こうした問題に対応できる子どもも数多くいたが、問題に取り組むことなく諦めてしまう子どもも同数程度いた、という実態があったようです。どうしてこのような結果になったのでしょうか。

単純に考えれば、当時までの教師たちが、読解というものを今よりも矮小化して捉えていて、特に「C」のような問い、つまり複数の情報と自らの経験や考えをつなぎ合わせた上でクリティカルに思考することを子どもたちに求めていく「熟考・評価」を読解指導の中でそれほど積極的に扱ってこなかったことが原因でしょう。もちろん、このデータは調査が始まったころの古いもので、現在は、初等・中等教育に携わる教師たちが先のA、B、Cのような問題をバランスよく関連づけて提供し始めたことによって、かなり状況は改善されてきています。

もう少し、今度は別のPISAの問題を解いてみましょう（問題略）。

地下鉄の路線図が描かれている配付資料を見てください。PISAでは、この路線図を用いて次のような問いが設けられています。

地下鉄を使って、佐藤町駅から森山町駅まで行く、もっとも短い行き方を考えてください。あなたが考えた行き方を、地下鉄路線図に描いてください。

この問いは、PISAの分類では「情報へのアクセス・取り出し」となります。ただし、ご覧のように問題は図のみで、文章は提示されていません。二種類の図を併せ読んで、必要な情報を拾い上げ、それらを結びつけて正解を導くというつくり

になっています。これも日常生活においてはよく直面する読解状況です。

皆さんの答えはどのようになりましたか。隣同士で確認してみてください。工事中の路線があるということをうっかり見落とすと間違えてしまいます。

皆さんに解いてもらったPISAの問題はごく僅かでしたが、示された状況や条件に合わせて、知識や技能を選択したり加工したり組み合わせたりして活用する柔軟な実践力を問うような問題になっているのが少しは感じられたでしょうか。

8 文学的文章教材の読解における三側面を具体化した問いの作成

PISAの三側面についての理解が深まったところで、先ほど残しておいた「ごんぎつね」の問いを考えてみましょう。今度はPISAの三側面を強く意識して、私流に言うところのA、B、C三種類の問いを文学的文章教材である「ごんぎつね」を用いて作り出してください。

どうでしょうか。うまくできましたか。隣の人と確認してみてください。次に「平和のとりでを築く」と同様、あまり良い例とは言えないかもしれませんが、三種類の問いのイメージを紹介したいと思います（イメージ略）。

9 文学的文章教材という複合テキストの読解

さて、インフルエンザの予防接種の二つ目の問題や地下鉄路線図の問題などを見ても分かりますが、PISA調査においても全国学力テストにおいても、文章だけではなく図や表などを読む問題が数多く登場します。PISAでは文章のことを連続型テキスト、図表や写真、イラストレーションなどを非連続型テキストと呼んで両者を区別しています。

私たちの実生活を思い浮かべると、読解の対象は、文章だけというよりも連続型テキストと非連続型テキストの混ざった複合テキストであることが多いように思います。文章だけを読解するというよりも、図表や写真、イラストレーションと文章とを関連させて総合的に読み解かなければならない場合が結構あるということです。

イラストレーションというと、ここにお集まりの皆さんの場合、文学的文章教材の中にある挿絵を思い浮かべる人も多いと思います。確かにそうです。小学校低学年の文学的文章教材の中には、絵本が原典となっているものが少なからずあり、そうした教材には表現力豊かな様々なイラストレーションが確かに埋め込まれています。こうした点において、小学校の文学的文章教材は、文章とイラストレーションとによって構成される、複合テキストであると言えるでしょう。

文学的文章教材の中のイラストレーションは、魅力的なものばかりです。そのため、大半の子どもたちは自然とイラストレーションに目を向けてしまうと思います。教師の中には、文

章理解を助けるために意図的に目を向けさせていく人もいるでしょう。こうした状態は、先ほどの複合テキストの読解云々という話ともつながります。

ただし、複合テキストだからといって、どの教材のイラストレーションにも同じように目を向けていってよいのかということそうではないような気がします。というのは、絵本などを原典とする教材群は、大きく「a文章主導型」「b絵画主導型」「c文章絵画統一型」の三種類に分類でき、それぞれ異なる作りになっているからです。これは鈴木敬司さんという人が提唱している分け方です。

まず、一つ目の「a文章主導型」というのは、先の「ごんぎつね」のような教材のことです。「ごんぎつね」は、新美南吉という童話作家が創作したお話に、挿絵画家がイラストレーションを付けた状態で教科書に掲載されています。あまきみこの「白いぼうし」なども同じです。そのため、教科書が違えば、基本的に同じ文章であっても全く異なったイラストレーションが付くことは珍しくありません。例えば光村図書出版の教科書ではかすや昌宏が描いており、東京書籍の教科書では黒井健が描いています。どちらも素晴らしいイラストレーションですが、互いに全く異なる印象を私たちに与えてくれます。

「b絵画主導型」は、絵画が話を引っ張っていくようなものです。国語教科書でいえば、小学校1年生の入門期に使用される絵話のようなものが当てはまります。連続型テキストはほとんど登場しません。絵本では『アンジュール』などが有名です。

最後の「c文章絵画統一型」の作品は、絵本作家が文章もイラストレーションも手がけています。文章と絵が合わさることによって、作家が表現しようとした世界は創り出されています。例えばアーノルド・ローベルの「お手紙」やレオ・レオニの「スイミー」のようなものが該当します。

こうした整理をもとに考えてみますと、「a文章主導型」の教材と「c文章絵画統一型」の教材は、外見上はよく似ていますが、文章とイラストレーションの関係は全く違うのだということが分かるでしょう。

「a文章主導型」の教材に描かれているイラストレーションは、童話作家が文章によって創り出した世界を挿絵画家が解釈した結果なのですから、そのイラストレーションをまた子どもたちが解釈するというのはどうなのかというわけです。一つ例を紹介したいと思います。「白いぼうし」は「a文章主導型」の教材ですが、そのイラストレーションには首を傾げたくなるものがあります。スクリーンをご覧ください（資料略）。これらの絵は、「細い裏通り」の場面を描いたものです。本来は狭い路地であるはずなのですが、これら絵では比較的道幅の広い通りや非常に開放的な場所になっています。また、「小さな団地の前の小さな野原」のイラストレーションにも違

和感を抱きます。決して「小さい」とは言えないような絵になっています。皆さんはどう思いますか。もしこうしたイラストレーションにあえて目を向けさせるのであれば、その描き方の妥当性などを問うような「熟考・評価」の読解を求めるといことになりそうですね。

一方、「c文章絵画統一型」の教材に描かれているイラストレーションは、絵本作家が文章と共に作品の構成要素として創り出したものですから、それを読まずして作品世界を理解することは困難です。これはつまり、「c文章絵画統一型」の場合は、複合テキストとして積極的に扱うことが可能ではないかということです。

残念ながら、教科書では紙幅の関係上イラストレーションが間引かれていることがほとんどで、「c文章絵画統一型」であっても、例えば「スイミー」ではその点数が絵本版の3分の1になっています。けれども、もし「スイミー」を複合テキストとして積極的に扱い、その世界を深く読解していくのであれば、残りの3分の2の絵も文章と併せて読んでいくことが、実は大切なことなのかもしれません。こうしたことは中学校国語教科書に掲載されている「大人になれなかった弟たちに…」という米倉齊加年の作品にも当てはまります。

いずれにせよ、イラストレーションは子どもたちを惹き付け、彼らの記憶に長く留まるような強力な力をもっているだけに、その扱いには慎重が必要です。

10 子どもたちの実態をふまえた柔軟な取り組み

今日は、「習得・活用・探究」と全国学力テスト、PISAの読解力調査等々の話をしながら、今の時代に求められている読解について整理してきました。その中で、読解指導や読解力には三つの側面があることや読解の対象が文章テキストに留まらないことなどを紹介し、読解というものの捉え方やその具体的な指導が一面的にならないよう留意していく必要性をお伝えしてきたつもりです。話が右へ左へと蛇行し、説明自体も下手で分かりにくい講演だったと思いますが、最後まで聞いて下さりありがとうございました。

今の時代もそうですが、これからの時代はさらに複雑で不安定、そして流動的なものになるはずですが、柔軟な実践力が必要とされる、そうした難しい時代を生きていくことになる子どもたちに、素敵な教育を是非提供してください。皆さんに大きな期待をしています。頑張ってください。

以上で私の講演を終わります。

【付記】

本抄録を作成するにあたって協力してくださった金沢大学の森琴音さんと老田千成実さんには感謝申し上げます。